

筑後耳納山系山麓の山岳信仰・霊場遺跡

岡 寺 良

はじめに

「筑紫次郎」として名高い九州を代表する大河・筑後川。その南に筑後川と並行するように標高600～800m級の山々が約50kmにわたって連なるのが「^{みのう}耳納連山」である。高良山はその西端にあたり高良大社（高良玉垂宮）をはじめ、古くより山岳信仰にまつわる寺社や遺跡が分布しているが（図1）、高良山以外の耳納山系にも、数多くの群集墳や中世山城などの遺跡が点在している。

筆者は、かつて実施した福岡県中近世城館遺跡等詳細分布調査（福岡県教育委員会2017）において、この耳納山系に所在する中世山城を実際に調査する中で、群集墳でも中世山城でもない、それらとは別の遺跡と考えられる遺物散布地を何ヶ所か確認したため、それらを別途「山岳遺跡」として報告した（岡寺2019）。それらは確実とは言えないが、山岳信仰や山岳霊場に関わるものが多く含まれている。また、その後も新たな情報を得たことによって、さらに同様の遺跡の発見に至っている。

本稿では、それら耳納山系北麓に所在する、現在にはほとんど伝わっていない「山岳信仰」の痕跡を報告し、筑後北部に古代～中世にかけて展開したであろう山中修行の一端を考察することとしたい。

1 耳納山系北麓の山岳遺跡事例

耳納山系は、東西に走る稜線を境として北側が福岡県うきは市と福岡県久留米市、南側が福岡県八女市となっており、西端部は全て久留米市となっている。本稿では特に密集が見られた久留米市田主丸町域およびうきは市域、八女市星野村域に所在する事例を重点的に紹介したい。具体的には、①森部の平家城周辺、②弦懸峠および周辺、③権現嶽、④石垣観音寺奥の院・観音寺山城、⑤伽藍寺（高野城）、⑥その他である（図2）。



図1 耳納山系周辺の山岳信仰関連施設・遺跡位置図

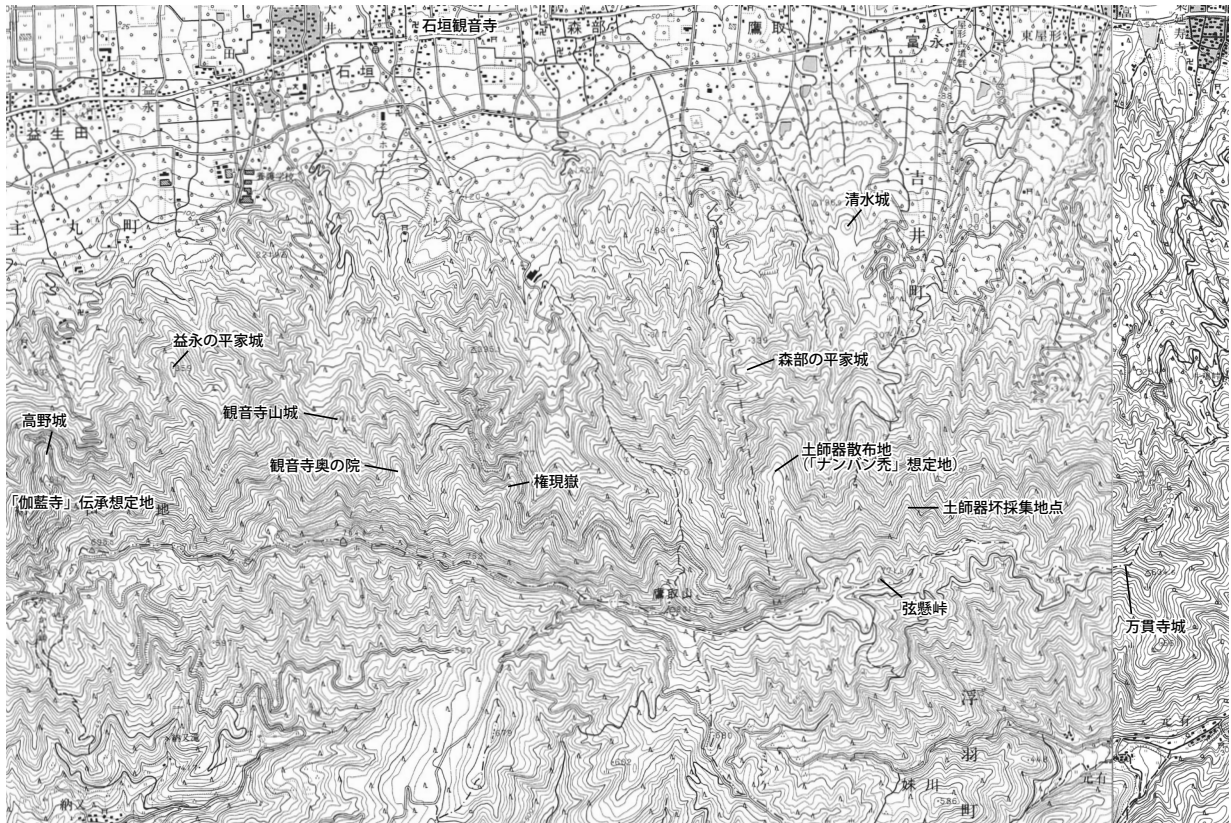


図2 耳納山系東部北麓の山岳信仰・霊場遺跡位置図

また、これらの遺跡の性格について、現地の状況に加えて参考にした文献として、「浮羽の古城址とその歴史」（以下、「古城址」という。）なるものをあげることができる（古賀 1953）。当該文献は、その表題のとおり、旧浮羽郡の城跡を調査・報告したものであるが、それらの記載には、現在では伝わらない山岳信仰に関わる伝承地や、その現地の状況が事細かに記載されており、当地域の中世山城のみならず、山岳信仰に関わる遺跡の実態を知る上でも非常に重要な記載がなされている。刊行から既に半世紀以上経過しているにもかかわらず、耳納山系の遺跡を知る上では未だなおというよりも、今になってこそ、その重要性は増していると考え、本稿ではこの文献も多用しつつ説明を進めることとしたい。

（1）森部の平家城周辺遺跡（久留米市田主丸町森部・うきは市吉井町鷹取）

久留米市田主丸町森部とうきは市吉井町鷹取との境、旧筑後国竹野郡と生葉郡との境近くに所在する。「古城址」には、「平家の城 水縄村森部」として江戸時代の記載を引き、以下のように記す。

「一、平家の城跡 海拔三八〇米 城跡は森部の安超寺の東南約二、〇〇〇米の船越村との堺にある。耳納連峰弦懸峠から派生した俗称「ナンバン禿」という峰頭から更に右に分派した支脈中にある山城である。」

「森部の東端冠村に境する山道を辿って空谷という谷を渡り、緩い斜面の山径を登ると、頂部を削って背後に掘割を設けた寺跡という所に達する。更に急坂を約一〇〇米上ると、頂部に一〇米平方位の削平地とし、左右の土砂を掻いて側防を嚴重にし、背後には巾二米位前城と思われる処がある。背後の野首を約一〇〇米伝つて、その尽きる処を八〇米ばかり登ると、

三峰に囲まれた窪地に達する。ここが平家の城跡という。(森部村丸山平助翁の談当時八十六才)中央の高峰が一の丸(四米平方)に当り左右が二の丸三の丸に当る。小さな山城であるが、石垣城と妙見城との繋の城に用いたものと思われる。」

今となっては、「ナンバン禿」や「空谷」といった地名の場所は明らかではなく、これらの記載全てを現地に置き換えて理解することは困難ではあるが、現在の市境近くにあることや標高や、窪地などにあることなどを頼りに現地を踏査すると、標高約360m付近の市境のやや東(うきは市寄り)は、三方を土塁状の自然地形に囲まれた自然の窪地状の平坦地形(東西約50m、南北約100m)があり(図3)、その近辺では8世紀末～9世紀代の須恵器や土師器が散布している状況が確認された。おそらくここが「平家城址」と伝承される場所と想定される。しかしながら、現地には確実に中世山城と認識できるような堀や土塁の遺構は見られず、中世山城と認定することは困難である。しかし、古代の遺物が散布することから、ここが古代の何らかの遺跡であることは考慮する必要がある。

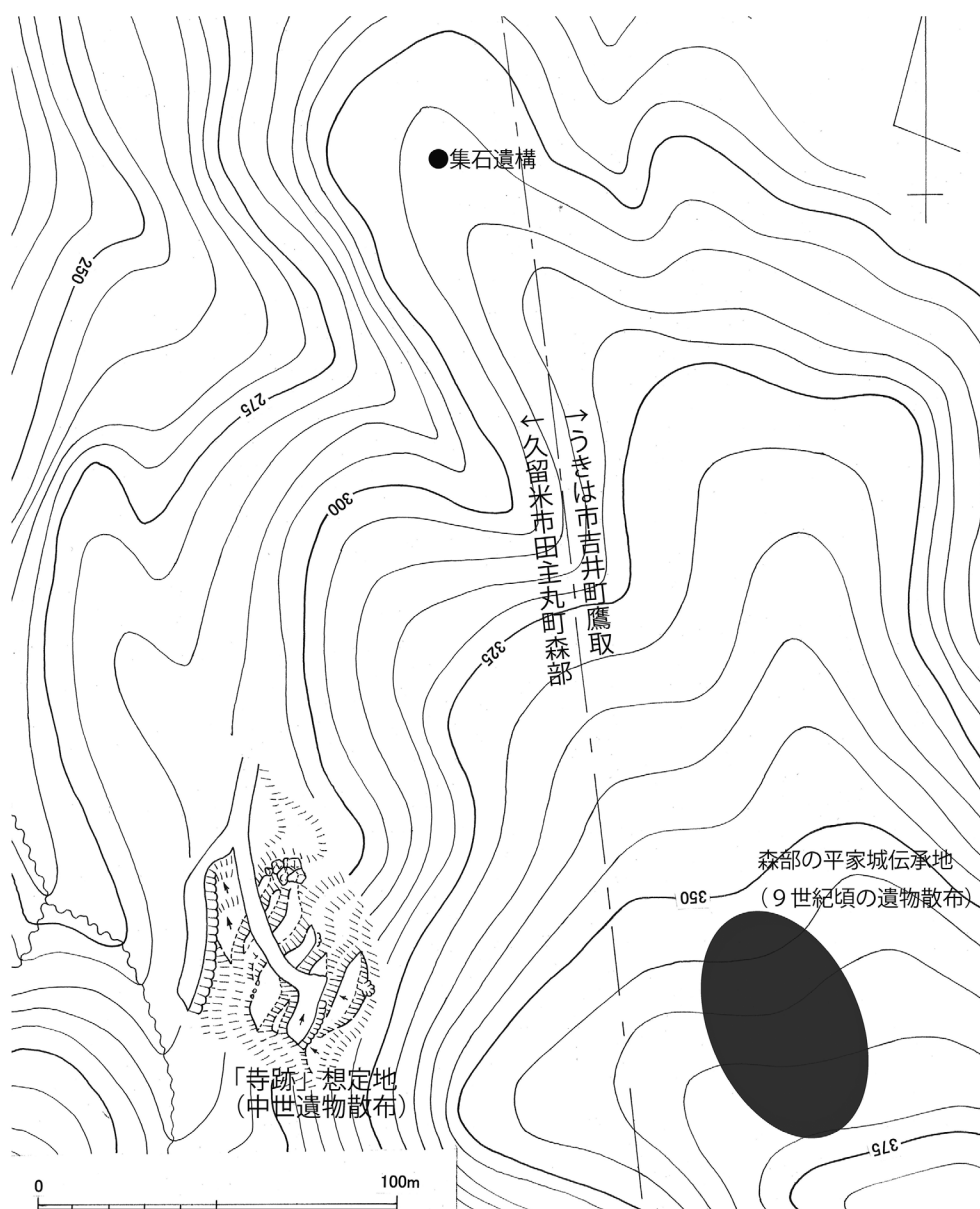


図3 森部の平家城周辺の山岳信仰・霊場関連遺跡位置図(岡寺2019)

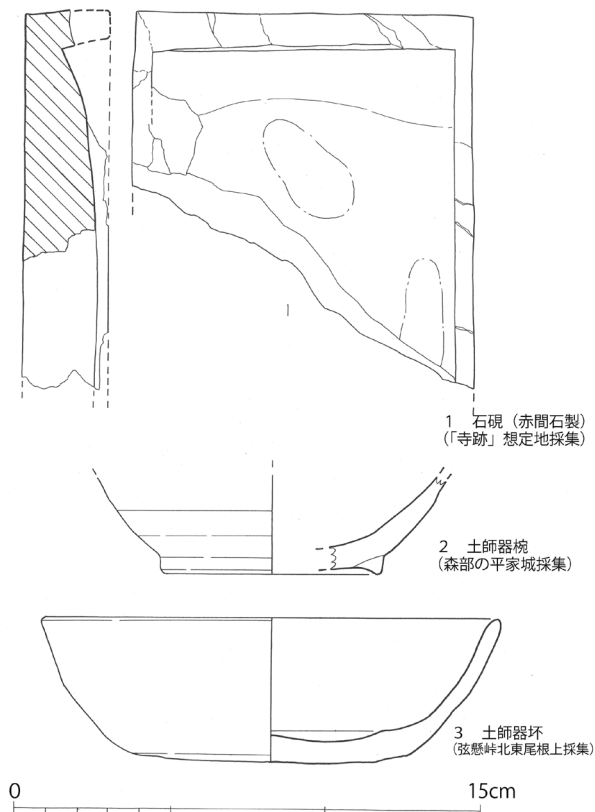


図4 森部の平家城近辺等採集遺物実測図
(岡寺 2019)

見られないものの、その時期の何らかの施設があったものと考えられる。

以上のように、「森部の平家城跡」と伝承される場所の現地の状況は、中世山城ではなく、むしろ山岳信仰に根差した平安～鎌倉時代頃の寺（草庵）や経塚などがあった可能性が高い。

(2) 弦懸峠およびその周辺（うきは市吉井町富永・うきは市浮羽町妹川）

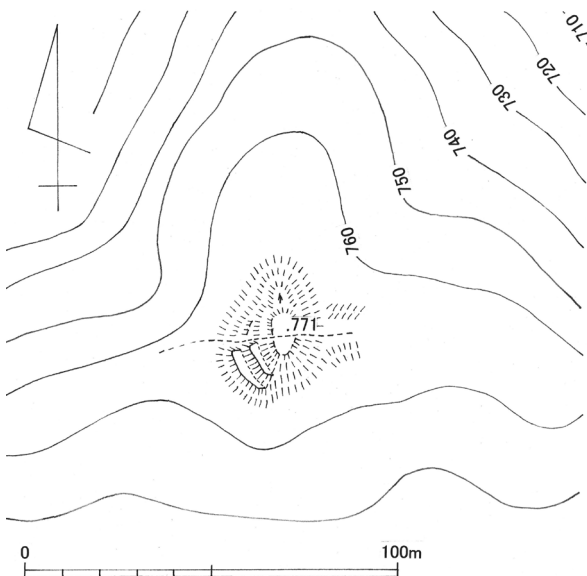


図5 弦懸峠平坦面群平面図（岡寺 2019）

また、「平家の城址」推定地点から西側の尾根を約 100 m 下り、谷間の標高約 300 m 地点（久留米市田主丸町森部所在）には、人工的に造成された小規模平坦面が数段確認でき、中世遺物が数多く確認される。それらの中には土器（図 4-2）・陶器の他、石硯（図 4-1）や宋銭、炭化した粃などもあり、中世遺跡が存在していることは疑いないであろう。「古城址」の記載にある「寺跡」の可能性も考えられよう。

また、「平家の城址」推定地から北へ尾根を下る途中にも、古代の土師器が散布している状況が確認でき、約 250 m 下った尾根の突端には、人工的に集石された塚状のものがいくつか確認することができる（図 3 集石遺構）。時期は不明ながら、その構造から経塚とも考えられるが詳細は不明である。また、「平家の城跡」推定地から尾根を南へ登った標高約 600 m 地点付近の尾根上（ここが「古城址」のいう「ナンバン禿」と考えられる）でも、古代～中世の土師器片の散布が見られた。人工的に造成された痕跡は

耳納連山の最高峰は、標高 901 m の鷹取山で、そこには生葉郡の中世領主・星野氏の城の一つ、鷹取山城が立地する。その鷹取山から東へ稜線を進んだ標高約 771 m の三角点のある地点は、「古城址」では「弦懸峠」と呼称する。その頂部から西側にかけて、非常に小規模ではあるが、人工的に造成された平坦面がいくつか確認できる（図 5）。特に西側斜面の平坦面周辺では、底部へラ切りとみられる土師器杯小片が散布しており、11 世紀頃のものと思われる。ただ、これら弦懸峠周辺の遺構配置を見ても、とても中世山城のものとは考えられず、峠の祭祀や、庵などの宗教関連のものに由来するもの

であろう。

また、この弦懸峠から北東へ尾根を下り、中世領主・星野氏の居城・妙見城の支城である「西の城」へ向かう尾根上、標高約 650 m 地点には、斜面であるにも拘わらず、完形に近い土師器 1 点を確認できた (図 4-3)。底部ヘラ切り調整で、9 世紀前半代頃のものと思われる。おそらくこの地点付近で埋没したものが、イノシシなどによって新たに掘り起こされたものであろう。周辺には平坦地形が全くないため、山中修行中の聖や僧侶が、偶然にも落としたものだろうか。

(3) 権現嶽 (久留米市田主丸町森部・石垣)

鷹取山の北西側支脈中にある。「古城址」には江戸時代の文献 (寛延記) の「岩屋権現 耳納山ノ内岩之社にて御座候」であるとし、以下のように記す。

「一、権現嶽の城 海拔五五〇米 旧記には無い通称岩屋権現」

「城址は石垣神社附近から仰ぐと、樹木鬱蒼、巨岩峨々とした処にあつて、主城石垣とは深い谷を隔てて東方にその雄姿を現わしている。鷹取峰からいえば西に派生した尾根の標高五五〇米の処にあつて登り難い峻坂の上にある。城址は東西二五米、南北二〇米 前後左右とも土砂を掻き峭壁として、観音寺山城とともに石垣城の附の城としてその使命を発揮している。祭神熊野権現は星野氏が崇敬した守護神であるから権現嶽の名が起つたという。祠は昔焼け失せて御神躰は麓森部村に移して祀つたと旧記には見えている。」

この権現嶽と考えられる標高約 550 m 付近の尾根上には、約 15 m 四方の方形をなす平坦面が確認でき、周囲には土師器小片の散布が見られる。また、その東側に 50 m ほど下ったところにも小平坦面があり (図 6)、そこにも土師器小片の散布が見られる。そして、最初の平坦面の南西にやや登ったところには突き出た巨石 (図 7) などもあり、磐座の可能性も考えられる。

このように、人工的に造成され、土師器使用なども認められる場であったことは疑いないが、明らかな城跡としての防御遺構や、城としての伝承等もないため、「古城址」の説くような古城跡とは考えられず、むしろ江戸時代の記載に見られる「岩屋権現」と呼ばれる信仰空間であったとみられる。

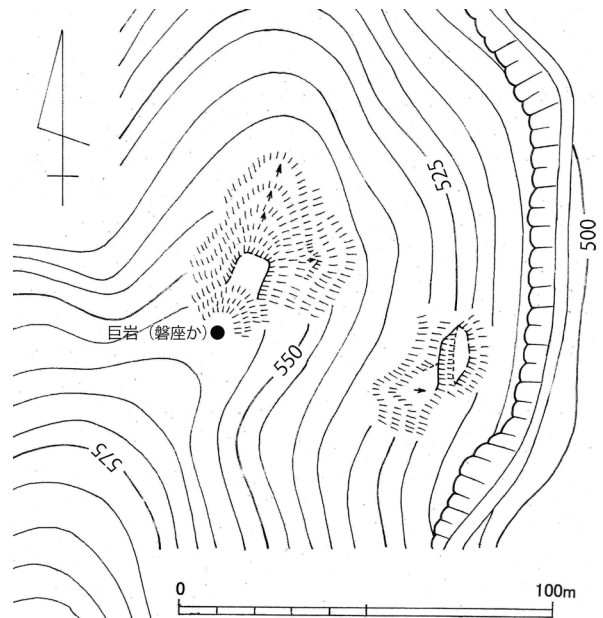


図 6 権現嶽平坦面群平面図 (岡寺 2019)



図 7 権現嶽南側の巨石 (磐座か)

(4) 石垣観音寺奥の院・観音寺山城（久留米市田主丸町石垣）

先ほどの権現岳の場所から西側に谷を二つ隔てた標高 520 m 地点には、石垣観音寺の奥ノ院が所在する（図 8）。この場所は、現在も麓にある石垣観音寺の奥の院として、「観音寺奥ノ院嶽ノ観音堂（竹野郡三十三ヶ所第 31 番札所）」が祀られている。周囲は多少造成されたとみられる平坦面が見られる程度で、尾根の付け根部分には磐座ともみられる大きな岩などもあり、古い遺物の散布は確認できないものの、古い段階からの信仰空間であった可能性が考えられよう。

「古城址」では「観音寺山城」という項目に、江戸時代の文献（寛延記）を以下のように引用している。

「嶽の観音『奥ノ院と申候 耳納山之八分許りに有之候 行基ノ作ノ大観音有之候 高山の頂き故 仏鉢露に朽多は相知不申候 尤も寺跡故清水又は花木等御座候』」

さらにその項目を詳述すると、

「一、観音寺山城址 海拔五二（ママ）米 城址は観音寺の南約二、〇〇〇米石垣城の西の谷を隔てて聳立した通称嶽の観音と名付ける峻峰の上にある。」

「古く山頂の景勝の地に寺院を建立した時代があつて、この寺の跡の要害を撰んで石垣城の側防を堅くするための出城（附の城）として利用したものと思われる。」
「城址は東西三〇米、南北三五米、前と左右は岩を穿つて絶壁とし、背後は約二〇米の削壁の丘になつている。丘には堀切の跡が見られる。城跡から東に巾一米の野首が八〇米続いていて、その尽きる処から城道が山頂に続いている。なお野首の中央には四六時清水の湧いている処がある。」

とある。かつての報告の際には（福岡県教育委員会 2017・岡寺 2019）、現地の状況が「古城址」の説明文とはやや異なっているものの、現在も嶽の観音堂と称されて存在していることや、標高の記載が「五二米」となっているが、「五二〇米」の誤記（おそらく誤記で良いと考えている）とするならば、ほぼ標高が一致することなどから、「古城址」の言う観音寺山城の場所は、現在の観音寺奥の院であろうと考えていた。しかし、その後 2023 年に観音寺奥の院の近くに、「観音寺山城」と思しき場所があることを新たに確認することができた¹⁾。



図 8 観音寺奥ノ院嶽の観音堂

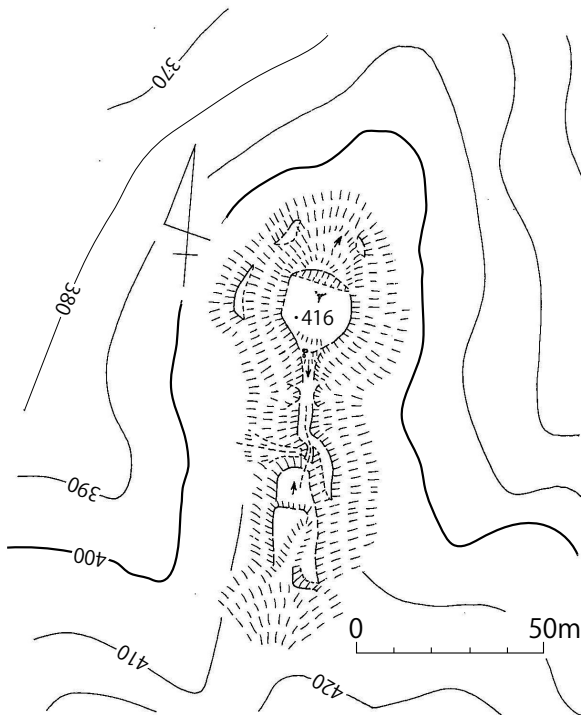


図 9 「観音寺山城」地点平面図（岡寺作成）

観音寺山城と考えられる場所は、観音寺奥の院の北西約 300 m、奥の院の尾根より一つ西側の尾根上、標高 416 m 地点である（図 9）。そこは北へ下る南北方向の尾根上で、南はやや鞍部となつて、標高 416 m 地点は頂部をなしている。頂部は、南半分を造成して直径約 30 m 規模の平坦面となしており、その南側鞍部にかけて通路状になっており、城に見られるような堀切はなく、西側斜面へ下りられるようになっている。さらに南側にも 2 面ほどの平坦面、頂部の北側から西側にかけても、小規模な平坦面が複数確認される。頂部の平坦面には石の集積が認められるほか、8～9 世紀の須恵器や土師器の散布が確認された。野首（鞍部のこと）の清水を除いては、「古城址」の「観音寺山城」の記載と類似する点が多く、石垣城（山ノ中城）の西の谷を隔て、金比羅山の西の谷を上り詰めた先のこの場所が「古城址」のいう場所「嶽の観音」の場所と考えて良いだろう。ただ、現地の状況では「古城址」のいうような堀切の跡はなく、城郭遺構という判断は誤認だと考えられる。

以上のことから、標高 416 m 地点は古代に平坦造成されており、堂宇のような施設があった可能性が考えられるだろう。

(5) 伽藍寺（高野城）（久留米市田主丸町益生田）

久留米市田主丸町益生田と八女市上陽町上横山とを結ぶ^{かんかけ}神掛峠の北側斜面、標高 480 m の尾根上に位置する。「古城址」には次のように記す。

「一、高野城址（かうの城） 海拔四八〇米

城址は益永及び麦生から八女郡横山村納又に越す神掛峠に近い奇岩峨々とした峻嶮の伽藍寺という処の細長い奇岩の上にある東西九〇米、南北一〇米の嶮要の地をいう。本城から北に派生した支脈の突端に、内山城がある。高丸、小丸、益永、葛尾の諸城は、右下に瞰したされ、附近に天狗岩、天狗杉と称する巨岩（巨杉は無い）がある。伽藍寺は、昔阿蘇の修験者が来て護摩を修した霊地で、行基嶽²⁾とともに仏縁の地である。旧神掛越に星野殿と称する星野氏の墳があつた由古老の話にきくが、今はその所在がはつきりとしない。」

として、さらに江戸時代の文献（寛延記）を以下の通りに引いている。

「天狗岩 中尾山と申杉山御座候 正徳五未年生
出山相願 享保八卯年御立山に被為仰付候 右
山ノ内に古木御座候て、天狗羽体（柴か？（筆者註））申伝候 大古五ヶ年以前枯木に相成申候
併山伏宿と申して肥後山伏峰入仕候由申伝候」

実際、高野城とされる場所には、小規模ながら曲輪群や畝状空堀群などの遺構が見られ（図 10）、明らかに中世山城として改修・利用されたことは明らかであり、周辺の山城同様、神掛峠防御のための砦の一つであったことは疑いない。また、「伽藍寺」は高野城の場所、あるいは城から尾根を登った背後にあたる（古賀 1938）とするも、現在は県道が入り

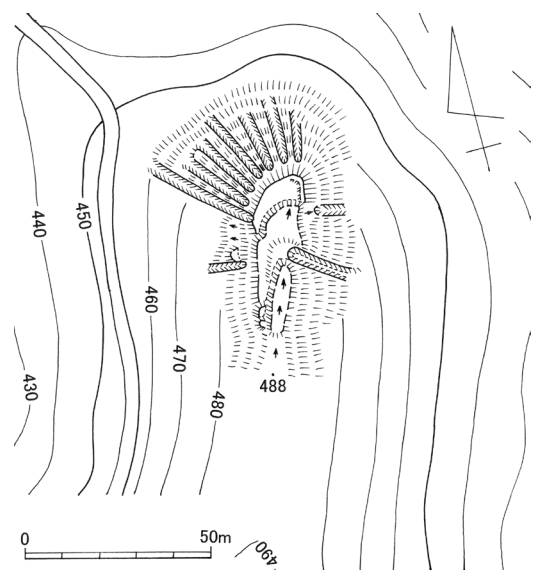


図 10 伽藍寺（高野城）平面図
（福岡県教育委員会 2017）

込んでおり、旧地形の読み込みが困難となっており、詳細を知ることができない。ただ、文献にあるとおり、現地には巨石がたくさん点在しており、天狗岩などを彷彿とさせる。このように山岳霊場としての直接的な根拠には現段階では乏しいものの、江戸時代以来の文献に「山伏宿」「肥後山伏峰入」などの記載があり、また「高野城」の「高野」も、山岳仏教の聖地「高野山」を連想させる地名となっているため、この地一帯が、往古山岳霊場としての聖地であった可能性が考えられよう。

(6) その他（益永の平家城、清水城、万貫寺城）

上記に挙げたほか、确实とはいいがたいものの、山岳信仰に関わるような遺跡や地名があるため、参考までに挙げておきたい。

まず、久留米市田主丸町の益永の平家城は、江戸時代以来、文献記載にもあり、星野右衛門太夫の城跡ともされているが、城の縄張りを見ると（図11）、二股に分かれた尾根上を単に階段状に平坦面群が並列する構造で、堀などのいわゆる防御遺構が見られず、中世山城の構造としてはやや特異である。またさらに現地で確認できる遺物も、平安時代後期の12世紀代の中国陶磁器が主体であり、城名の示すように平家ならばともかく、戦国時代の星野氏の城のものとは言い難い。城である可能性が薄いとすれば、山岳信仰に関わる遺構である可能性も考えられよう。

次にうきは市吉井町富永の清水城は、麓に清水寺跡と呼ばれる往古の寺院跡の伝承地を有する山城で、現地は自然地形であるものの、中世期の土師器片などが分布する。「古城址」の「清水城」の項には、「山麓に清水寺の跡と伝える地点があり、仏具が発掘された」とあり、また、当地の南西約250m地点では、中世期の金剛界大日如来の種子「バン」を刻んだ板碑なども見つかっており（大津2019）、この一帯が清水寺に関連する施設があった可能性も考えられよう。

なお、麓の清水寺跡周辺からは、過去に単弁八弁軒瓦や複弁八弁軒丸瓦などの古瓦も採集されており（九州歴史資料館1982・大津2019）、飛鳥～奈良時代の寺院があったと推測されている。

最後に、うきは市浮羽町妹川・うきは市吉井町富永の万貫寺（満願寺）城は、耳納連山の東端、牛鳴峠から稜線に上った突端に位置する中世の山城であるが（図12）、「古城址」には「万貫寺」の地名は寺に由来するとある。

「満願寺城は延寿寺から妹川へ通じる牛鳴峠の南方耳納連峰の最東端に雄姿を現わしている。

牛鳴峠から南に延ぶ林道を行けば途中で寺屋敷と称する削平地がある。元天台宗満願寺の跡という。」

「（城の）附近に鐘つき堂、寺中と称する地名がある。城址は寺院の奥ノ院であつたと思われる。同寺はのち屋部村に移つて現在の真宗満願寺となつた。」

と記している。さらに【古賀1938】では、上記の他、「西ノ谷」「中ノ谷」「東谷」の地名をあげ、今なお寺院に由緒ある遺物が発掘されるとし、寺の存在を确实視している。それらの遺物は現在みることはできず、また詳細な位置もよくわからないため、確実なことは言えないが、中世山寺の存在の可能性を示唆するものだろう。

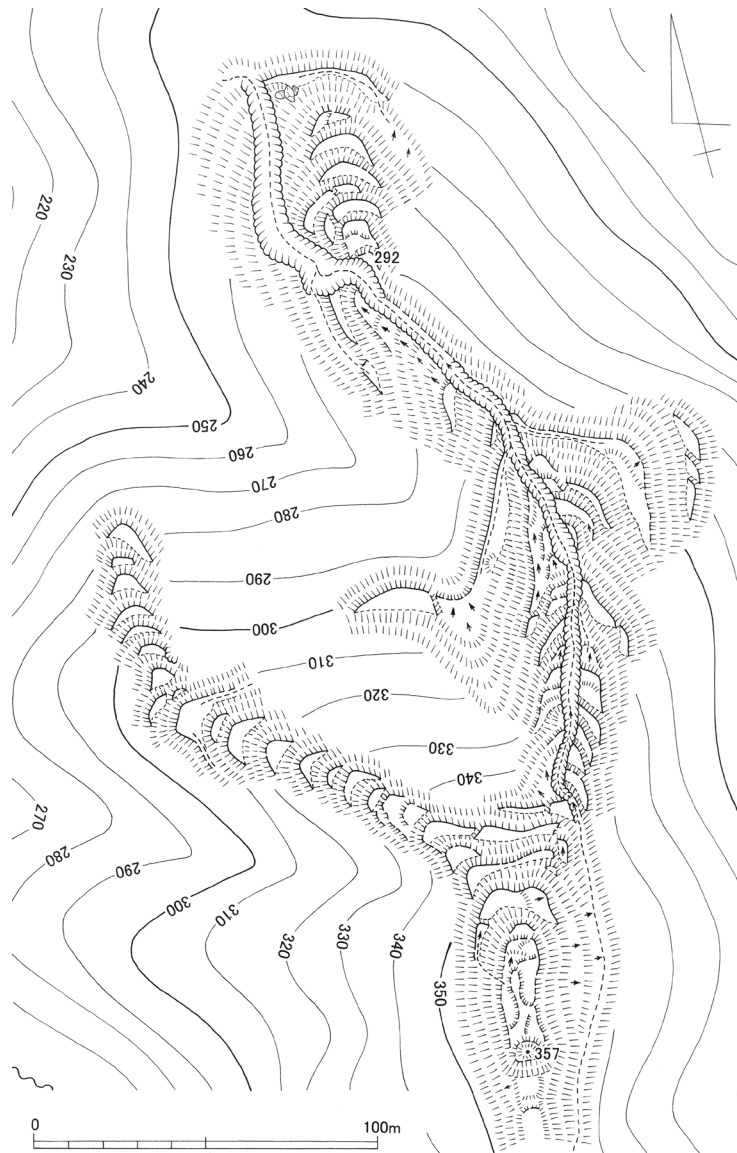


図 11 益永の平家城縄張り図（福岡県教育委員会 2017）

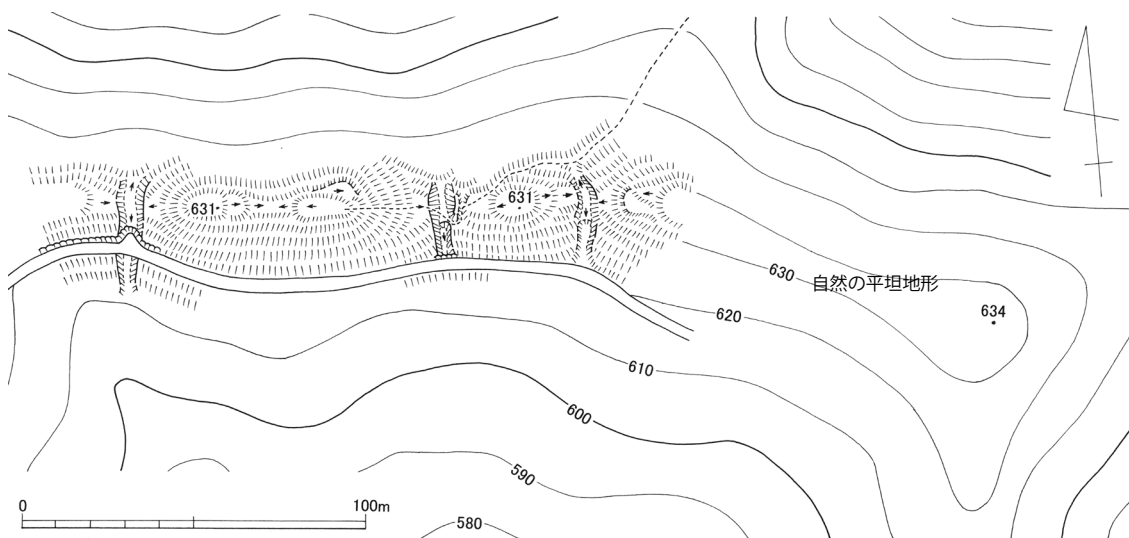


図 12 万貫寺（満願寺）城縄張り図（福岡県教育委員会 2017）

2 耳納山系周辺の事例

上記のように、耳納山系の主に東部北麓に展開する山岳信仰に関連する遺跡を見てきた。耳納山系およびその周辺には、各所に同様の山岳信仰に関連する古代～中世の遺跡があるため、関連事象として、それらも確認しておきたい。

(1) 高良大社・高隆寺

耳納山系の西端には、高良山（標高 312 m）が聳え、その西側、約八合目あたりの標高 227 m には現在高良大社（高良玉垂宮）の社殿が立ち並んでいる。大社の社殿を頂点に、北（王子谷）、北西（北谷）、西（中谷）、南西（南谷）の四筋に延びる尾根上には、現在も参道と、かつてあった坊院の平坦面群が数多く展開している。これらの多くは中世から近世にかけて爆発的に形成されたものであるが、山中では古代の遺物なども確認されている。中でも大社社殿の北西尾根の二面の平坦面に渡り、古代の瓦が採集されており、玉垂宮の神宮寺・高隆寺の跡地と考えられている（古賀 1972）。

また、次にふれる明星山の北麓には西行山瓦窯跡が確認されており、瓦が多く散布していたという（古賀 1981）。その瓦には、縄目や斜格子の叩打痕が見られ、採集された中には、「延喜十九年」（919）の紀年銘を有する丸瓦や、「国分」銘の文字瓦などが確認される。これらの瓦は、高隆寺跡を初めとする高良山周辺の他、筑後国府跡、筑後国分寺跡、永勝寺（久留米市山本町豊田）などの周辺寺院で確認されている（小澤 2019）。

(2) 明星山（明星岳）

高良山から南へ谷を隔て、約 2 キロ先にある山稜には、標高 362 m の明星山が位置しているが、『高良山雑記』（古賀 1969）には、「明星院」として、「昔し明星院と云ふ寺院明星岳に在ったが高良



図 13 明星山山頂散布の瓦

山元社務所の処に移り、明静院と変へたり同院の僧は妻帯させなかった」と記しており、山中に明星院という寺院があったことを伺わせる。

実際、山頂周辺には、赤褐色の胎土の古瓦が散布しており、凸面に斜格子の叩打痕を確認することができる（図 13）。後に山麓に移った明星院に直接かわるものかどうかはわからないが、いずれにせよ、平安時代に明星山山頂付近に瓦葺きの堂宇のような建物があった可能性は高いだろう。

(3) その他耳納山系西側の事例

耳納山系西側には、上記の高良大社（高隆寺）、明星山の他、いくつかの事例を確認することができる（図 1）。特に高良山の北東麓の久留米市山本町には、永勝寺・千光寺・観興寺など、古代から中世にかけての開基伝承を持つ寺院が、山の麓近くに建ち並んでいる。さらにその東の久留米市草野町にも、若宮社や発心三社権現などもあり、若宮社には、中世期の宋風狛犬の石像が伝えられている。ただ現状では、この一帯の山中からは山岳信仰に関する遺跡は確認できていない。

おわりに

以上、耳納山系北麓を中心に山系周辺の山岳信仰や山岳霊場に関わるとみられる遺跡を見てきたが、古くは古代（9世紀代）から中世に至るまで、幅広い時期と分布を見せる可能性があることが分かった。

古賀基司は、耳納山系に分布する中世山城と山寺との間に関係性があるとみて、「耳納連峰を長蛇に例ゆれば当城（万貫寺城）は、その頭に当り、高良山は尾に当り、この頭尾に在った天台宗の両寺院が、吉野朝の頃は首尾連繋して敵を悩まし、星野の地に一步も踏み込ませなかつたものである」として、南朝方の星野氏が山寺の僧兵と連携して耳納一帯を防衛していたと類推している（古賀 1953, PP.12-13）。可能性はないとはいきれないが、残された中世山城の多くは戦国期のものであろうし、また山岳信仰に関わる遺跡も古代から中世と幅広く、時期的にそれらが連携したものであるか否かもよくわからない現状では、鵜呑みにすることは難しいであろう。

一つ特筆すべきは、中世以前の9世紀代を中心に、耳納山系の各所において、古瓦や須恵器・土師器が出土する地点が散在していることである。これらの多くは山頂の平坦地形、あるいは尾根頂部を人工的に造成して平坦面を造り出したような場所に位置していることから、寺院の堂宇が存在した可能性が高い。

これらの参考事例として、筑後川の北岸の筑前国内となるが、朝倉市屋形原で見つかっている堂ヶ尾廃寺跡を紹介しておきたい。当遺跡は、古くから古瓦が山中に散布している地点として知られていたものだが（加藤 1958）、長らく詳細な場所は不明であった。しかし2017年の山中踏査によって再発見がなされている（倉本・中島・遠藤・岡寺 2017）。発見地は、標高275mの尾根の頂部に位置し、頂部には一辺約30mの平坦面を造成し、さらにその中央には基壇とみられる一辺10mの高まりが確認でき、その南側にも連続して二面の平坦面が確認され、東側には石垣遺構も認められる。その北側背後を中心に大量の瓦が散布するというものである（図14・遠藤 2021）。古瓦には大宰府式の鬼瓦の他、大宰府政庁と同範の軒丸瓦や文字瓦が確認されている（甘木市 1986・遠藤 2021）。尾根の頂部に瓦葺の小堂を構え、僧尼の山中修行や、得度して持経者となるための法華経暗誦などの行をする「山林寺院」と考えることができる。さらには大宰府に関わる瓦が出土していることから、その造営・運営には郡衙（この場所は筑前国下座郡にあたる）などの公的な関与が想定される。

耳納山系の各所でみられるこれらの遺跡は、堂ヶ尾廃寺のような、いわゆる「山林寺院」として評価することができるのならば、筑後国府の主導により、さらには麓の古代寺院³⁾と連繋する形で、山中修行を行うための基地として各所に造られたものではなかろうか。

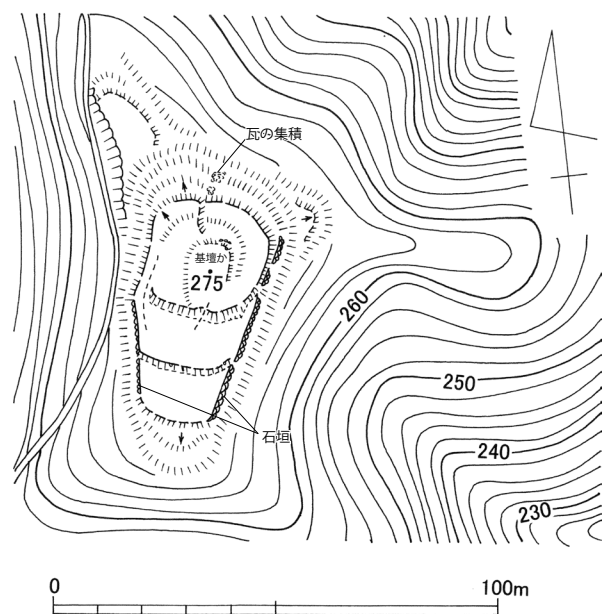


図14 堂ヶ尾廃寺跡平面図（岡寺作成）

さらにやがて平安時代後期以降には、高良山高隆寺、石垣山観音寺、そして満願寺のような天台寺院勢力の影響によって耳納山系の各所において山中修行を行うようになっていった可能性も考えられよう。また、現在知られている阿蘇修験の峰入りについては、近世以降のものが文献史料等から知ることができるが（熊本県教育委員会 1980）、その峰中路は八女市星野村までで、耳納山系には一切通ることではない。しかし、今回紹介した「伽藍寺」の伝承にあるような阿蘇修験の影響も、中世以前にはあった可能性もあるかもしれない。場合によっては、耳納山系もまた、阿蘇や彦山の峰入のように金胎両部の曼荼羅観に基づいた入峰修行を行う行場・札所などが設定されていた可能性も想定できるだろう。

ただ、それらのような活発な山中での宗教活動があったと想定できるものの、近世に至り、高良山を除いて、活動が途絶えてほぼ廃絶し、耳納山系は一部の伝承を除いて、宗教空間であったことは忘れ去られていったと考えられる。

今後は、立体地図なども用いた未踏査地域の遺構探索、山中に存在する山城遺構なども含めた遺跡についての総合的な検討、伝承・文献史料の洗いなおしなどにより、より一層耳納山系の古代・中世の山岳宗教の実態に迫っていく必要があるだろう。

註

- 1) この「観音寺山城」の推定地の所在については、長澤泰輔氏からご教示いただいた。記して謝す。
- 2) 行基嶽については、「古城址」の「高丸城」の項目に、「石垣観音寺旧記には行基が百ヶ日の護摩を修し障難を除いた霊場で、行基作の不動尊像を安置した処としてある。よって此の峰を行基嶽と名づけ辻堂が建っている」とあり、高野城の東側にある高丸城の近辺に所在するものと考えられるが、詳細な場所は不明である。
- 3) 耳納山系の麓には、古代まで創建をさかのぼる石垣観音寺などがある他、観音寺の近辺の石垣地区や森部地区、さらにはうきは市吉井町富永の清水寺跡周辺でも古瓦が採集されている（九州歴史資料館 1982）ため、古代寺院が複数あった可能性が高いと考えている。

参考文献

- 遠藤啓介 2021「堂ヶ尾廃寺」『宝満山の古代山岳信仰』（第10回九州山岳霊場遺跡研究会資料集）
- 大津諒太 2019「冠遺跡（清水寺跡）」『高良山と筑後の山岳霊場遺跡』（第9回九州山岳霊場遺跡研究会資料集）
- 岡寺 良 2019「耳納山系北麓の山岳遺跡」『高良山と筑後の山岳霊場遺跡』（第9回九州山岳霊場遺跡研究会資料集）
- 小澤太郎 2019「高良山高隆寺跡採集の古瓦」『高良山と筑後の山岳霊場遺跡』（第9回九州山岳霊場遺跡研究会資料集）
- 加藤新吉 1958『三奈木村の生い立ち』加藤村長遺稿出版委員会
- 九州歴史資料館編 1982『田中幸雄寄贈品目録』
- 熊本県教育委員会編 1980『古坊中』
- 倉本慎平・中島 圭・遠藤啓介・岡寺 良 2017「福岡県朝倉市堂ヶ尾廃寺の『再』発見と調査概要」（平成29年九州考古学会総会研究発表資料）
- 古賀 壽編 1969『高良山雑記』筑後地区郷土研究会
- 古賀 壽 1972「高良宮の創祀と神宮寺」『地方史ふくおか』9 福岡地方史研究連絡会議
- 古賀基二 1938「星野氏の諸城址踏査記」『郷土研究 筑後』第六巻 第三號 筑後郷土研究会
- 古賀基司 1953「浮羽の古城址とその歴史」『浮羽古文化財保存会誌 宇枳波』第2号 浮羽古文化財保存会
- 福岡県教育委員会 2017『福岡県の中近世城館跡』Ⅳ—筑後地域・総括編—

（おかでら・りょう 本学文学部准教授）

Ruins of Mountain Worship and Sacred Sites at the Foot of the *Chikugo Minou* Mountains

by

Ryo Okadera

The Mino Mountain Range, which runs parallel to the south side of the Chikugo River in central Fukuoka Prefecture, is a mountain range dotted with many ancient ruins. In the history of the region, medieval castles and burial mounds have attracted attention as archaeological sites, but other types of artifact dispersal sites and artificially created surfaces can be found in various locations. This paper reports and discusses these sites as “Sanrin-Jiin,” considering them to have been facilities based on mountain worship. According to local traditions, many of these sites are said to have been sacred or spiritual places based on mountain worship, and some of them had flat surfaces that could have formed small halls. Furthermore, the fact that temples and shrines that have existed since ancient times, such as Kora Taisha Shrine and Kannon Temple, are scattered on the western side of the mountain range is considered to be a collateral evidence of these sites.

Based on the above discussion and comparison with other examples in the surrounding area, we have pointed out the possibility that this area was a religious space where monks and nuns practiced asceticism in the mountains and forests in ancient times, and where ascetic ascetics practiced asceticism in the mountains in the Middle Ages and later.